

人間の経済

第2期 第 **52** 号 (通巻 130 号) 2006 年 7 月 11 日

目次

週刊マーケットレター(06年7月3日週号)

主要マーケット指標

FRBの利上げはまだ続く

失業率の改善と消費の低迷

曾我 純

quote of this week/

政商

森野 榮一

週刊マーケットレター (06年7月3日週号)

2006年7月2日

曾我 純

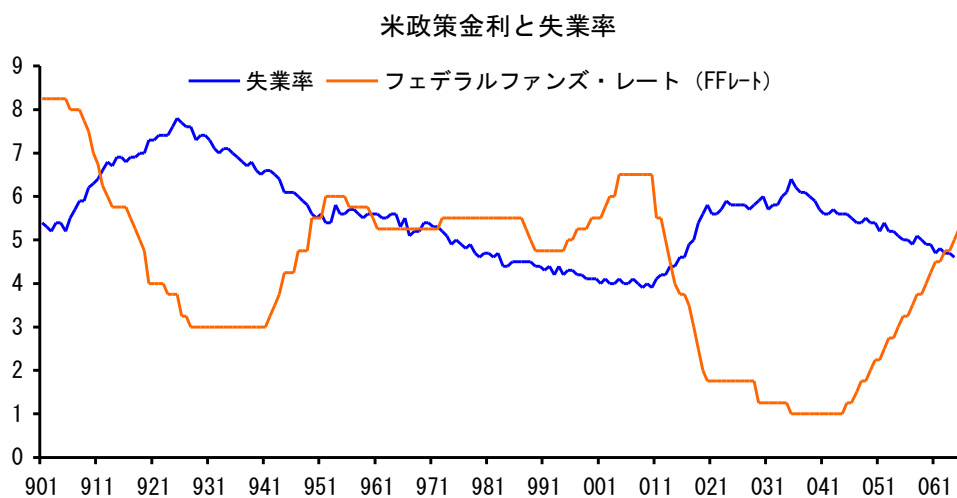
■主要マーケット指標

為替レート	6月30日(前週)	1カ月前	3カ月前
円ドル	114.70(116.55)	112.60	117.75
ドルユーロ	1.2790(1.2505)	1.2805	1.2115
ドルポンド	1.8480(1.8185)	1.8695	1.7375
スイスフランドル	1.2235(1.2485)	1.2185	1.3040
短期金利(3カ月)			
日本	0.35500(0.34375)	0.29813	0.11188
米国	5.48063(5.48000)	5.23813	5.00000
ユーロ	3.05763(2.99713)	2.92763	2.81700
スイス	1.52000(1.50000)	1.42333	1.24917
長期金利(10年債)			
日本	1.920(1.870)	1.830	1.770
米国	5.14(5.22)	5.12	4.85
英国	4.72(4.75)	4.62	4.40
ドイツ	4.05(4.07)	3.96	3.87
株 式			
日経平均株価	15505.18(15124.04)	15467.33	17059.66
TOPIX	1586.96(1545.57)	1579.94	1728.16
NYダウ	11150.22(10989.09)	11168.31	11109.32
S&P500	1270.20(1244.50)	1270.09	1294.83
ナスダック	2172.09(2121.47)	2178.88	2339.79
FTSE100(英)	5833.4(5692.1)	5723.8	5964.6
DAX(独)	5683.31(5529.74)	5692.86	5970.08
商品市況(先物)			
CRB指数	346.39(335.04)	344.87	333.18
原油(WTI、ドル/バレル)	73.93(70.87)	71.29	66.63
金(ドル/トロイオンス)	613.5(584.8)	642.5	581.8

■ FRBの利上げはまだ続く

FRBは28、29日開催のFOMCで政策金利を0.25%引き上げ年5.25%とした。FOMCの声明は、今後の追加利上げは物価と経済成長の両面を睨みながらになると述べ、金利引き上げが最終段階に差し掛かっていることを窺わせた。声明を好感し、米株式と債券相場は上昇した半面、主要通貨に対してドルは売られた。ドル安により金や原油等の商品市況は強含んだ。

米1-3月期の実質GDPは年率5.6%に上方修正され、4-6月期がこのような高い成長から減速することは間違いないが、05年の3.5%程度は確保できるのではないだろうか。1-3月期の伸びは05年10-12月期が1.7%に低下したことの反動であり、05年9月から06年3月までの半年でみれば3.7%と05年4月から9月までの成長率と同じである。やや長い期間をとれば、米経済成長率は低下しているとはいえない。FRBは「最近の指標をみると、経済成長は06年初めの極めて力強いペースから減速しつつある」と心配しているが、4-6月期は適正な姿に戻るだけで、減速という表現は相応しくない。



出所：BLS

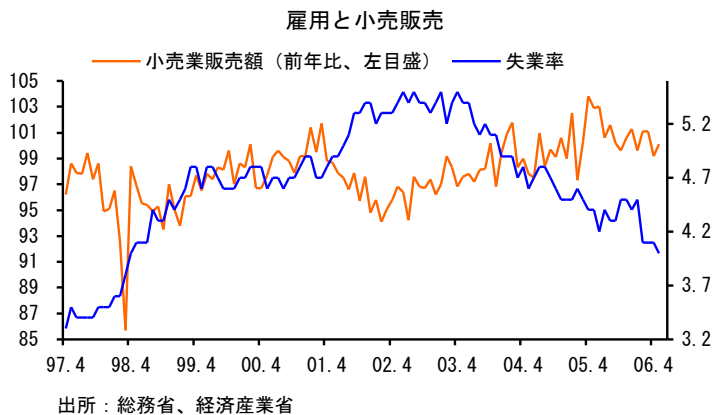
先週末発表された5月の米個人消費支出は前月比0.4%増と伸びは4月より低下したものの、4-5月期では1-3月期の伸びをやや上回っており、消費は好調である。個人消費支出は前年比では6.7%増と4月の伸びを0.5ポイント上回り、幾分上昇傾向を示している。6月がよほど悪くなれば別だが、そうでなければ4-6月期の個人消費支出は高い水準を維持できるだろう。民間設備投資も2桁増を期待でき、7月28日に公表される4-6月期の米GDPはそれほど落ち込まず、米国経済は引き続き強い成長を続けることが確認できる内容になるはずである。

今年2月に発表したFRBの06年経済見通しによると、名目GDPは5.5%~6.0%、実質GDPは3.5%、個人消費支出物価指数(食料・エネルギーを除く)は2%(これらは06年10-12月期の前年比)、失業率は4.75%~5.0%(06年10-12月期平均)という予測になっている。1-3月期のGDPは名目、実質とも見通しを超えており、4-6月期も予測に収まるような数値にはならないだろう。個人消費支出物価指数は5月、2.1%と2ヵ月連続で予測を上回り、失業率も4.6%(5月)と予測以下に低下しており、実体経済はFRBの想定よりも強い。「金融引き締めとタイミングは、物価と経済成長の見通しの変化に左右されるだろう」(FRB)とはいうが、経済が予測を超えている状態では打ち

止めよりも引き締めの可能性が高いとみるべきである。

■ 失業率の改善と消費の低迷

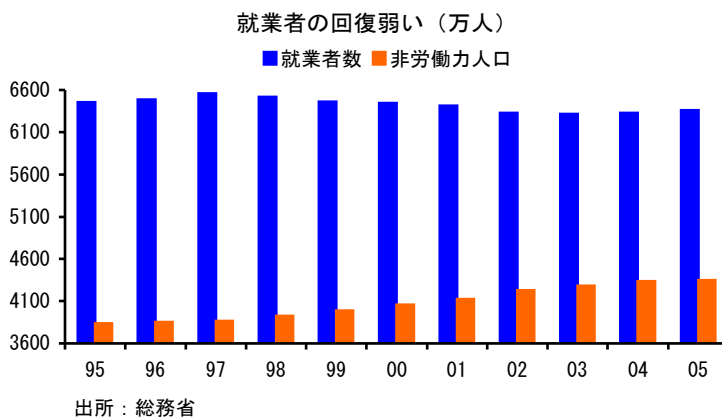
5月の完全失業率は前月比0.1ポイント低下の4.0%と98年4月以来の低い水準に改善した。完全失業率が低下すれば、消費は増加すると考えられるが、日本経済の場合にはそのような論理は当てはまらない。それは就業者の増加がきわめて緩慢であるからだ。



年ベースでは就業者は03年の6,316万人を底に回復しているが、05年でも6,356万人にすぎない。06年5月も6,448万人、前年比13万人増にとどまっている。

これだけ緩やかな増加でも失業率が改善しているのは、労働力人口（就業者+失業者）

にカウントされない非労働力人口が増加しているからである。失業者に該当する人の相当数が非労働力人口にシフトし、失業率の改善に寄与したと考えられる。



05年の非労働力人口は4,346万人、10年前に比べると510万人増加した。仕事を探すことをあきらめた人や『国勢調査速報結果』でもあきらかになったように65歳以上の高齢者の急増、企業支配が強まったことに

よる労働意欲の喪失等が非労働力人口増の要因であろう。

就業者が緩やかに増加していることが、失業率の低下にもかかわらず消費が増加しない原因なのである。5月の小売業販売額は前年比+0.1%とやっとプラスだが、原油高で燃料等が伸びているからであり、これを除けばマイナスである。『家計調査』によれば、5月の全世帯消費支出は前年比1.2%減と1月以降5ヵ月連続の前年割れだ。特に、実収入や

可処分所得の大幅な減少により、勤労者世帯の消費支出が不振である。

消費の低迷によって、物価が急激に上昇する可能性は低い。5月の消費者物価指数（生鮮食品除く）は前年比0.6%と4月よりも0.1ポイント上昇し、7ヵ月連続プラスとなったが、灯油やガソリン高による光熱・水道、交通・通信の寄与率が8割弱を占めており、物価全体が上昇している状況ではない。季節調整値（生鮮食品を除く）は5月、前月比0.2%上昇したが、4月までの3ヵ月は横ばいで推移していた。食料・エネルギーを除く指数は前年比+0.1%と前月よりも0.1ポイント低下しており、物価の基調は引き続き安定しているといつてよい。

quote of this week

政商

森野 榮一

打ち寄せる波のように事件の続くなかで、事の風化してゆくは速いのでしょうか、しかし村上ファンドに象徴される「規制緩和」の「改革」も、結局は規制緩和に群がった一群の利権確立の所業であったことは忘れることはできません。同ファンドを育て上げるに一役買ったのは、オリックスの宮内義彦会長であったことはよく知られていますし、そうした人物が政府の「規制改革・民間開放推進会議」の議長を務めているのですから。民間企業から規制緩和の要望を出させるわけですが、要望を出すのは当のオリックスがとにかく多く、緩和されるや、その分野にオリックスの関連企業が進出するというわけです。まったくご自分の会社を使った自作自演で利益をあげようとする光景です。こうした人物の人脈には日銀の総裁まで入っていることを知ると、国民としては、この間の「新自由主義的」な小泉改革を深く疑問に思わざるをえません。

たしかに、政商はいつの時代もいるものなのでしょう。けれども、政商とはなんでしょう。かつて伊藤痴遊は明治の三大政商の一人で、明治の怪商ともいうべき、山城屋和助を取り上げた一文で¹、こう述べていました。

政権を利用して、金儲を為る、一種の商人があつて、巧みに政府の大官に
取入ることは勿論、政治の動きや、法律の改廃を目がけて、一と綱に、大金を
掬ひ取る、といつたやうな、変則の商人、之れを名づけて、政商と謂ふので
あるが、昨今に至つて、さうした商人が、非常に殖えて来たけれど、明治の
初年から、その政商なるものは、既に在つたのである。

この政商の定義が適切で、伝えられる事実に間違いがなければ、例外なく、昨今でさえ政商が跋扈しているということになりましょう。ただしその中身たるやどうでしょう。

ここで少し山城屋和助という人物の場合を思い起こしてみましよう。

彼の前身は長州の奇兵隊で軍監を努めていた山縣狂介²を補佐していた野村三千三です。勤王の志士として活躍した闘士でありました。京の五條の橋の下で乞食に身をやつし阿呆陀羅經を唄いながら佐幕派の動静を探った活躍は芝居にも取り上げられたそうです。維新後、彼の活躍と長州閥の勢力拡大を考えれば、官僚としてのかなりの出世が望めたでしょう。彼は自身の前途を考え、民間人になる決意を固めます。そうして大村益次郎、前原一誠に続き兵部省の兵部太輔になり、陸軍の実権を握るようになった山縣のもとを訪ね、自身の考えるところを述べることとなります。

伊藤痴遊はその様をまるで見てきたかのように、こう描いています。

『それは大い決心ぢやな。貴様は、町人に成下る覚悟か』

『左様ぢや』

¹伊藤痴遊、「政商山城屋和助」、『維新秘話』（伊藤痴遊全集第10巻）所収、昭和3年。

²山縣有朋のこと。有朋と称したのは維新後。

『何故、さういふことを考へたのか』

『夫や、今言うた通りの次第で、政府の役人として、十分に権威を振ふことが出来ないとすれば、町人に成下つて、金の力で多くの人を、動かしても見たいと思ふ。又是から後の世の中は、町人ぢやとて、今までのやうなものではあるまい。我輩も熟々考へた末、是が一番に良い分別と、覚悟を決めてしまつたのぢやから、今更に止め立てをして呉れるな』

『さういふ譯ならば、強ひては止めぬが、併し今日の相談といふのは、何か』

『そこで、君の力を借りなければならぬのぢや。それも未長くといふのではない』

『どうしろといふのか』

『実は、陸軍の御用達を、引受けさせて貰ひたいのぢや』

『ナニツ、陸軍の御用達になりたいといふのか』

『ウム、左様ぢや、それも為替方を引受けたいの、何のといふ譯ではなく、陸軍で使ふ品物の買入は、一切我輩の手を経てするやうにして貰ひたいのぢや』

『成ほど、夫や面白からう』

『君の聲掛りで、それが出来るとなれば、世間で謂ふ士族の商法でなく、相手が政府ぢやから、貸倒れもなく、品物を持つて来て、右から左へ、金の授受が出来るとのぢやから、損をすることのないのは請合といふ、洵に手堅い商法ぢや。…』³

野村はこんなうまい話を山縣に持ちかけ、彼の声掛かりで、陸軍相手の商売を始めます。なにしろ山縣が付いているのですから、納める品物の検査は寛大ですし、代金は会計係に言えばすぐに受け取れ、場合によれば、商売の都合だと言って代金以上の金を受け取れる場合もあり、官省相手の、必ず儲かる商売を始めることができました。山城屋の身代は当然太っていくことになります。

しかし、これは山城屋の資本を増加させ、商いの實際を山城屋に体得させはしたでしょうが、山城屋和助のねらいはこんなところにはなかったのです。彼が考えていたのは、外国人相手の大きな商売でした。彼はしばしば横浜に出かけ、我が国の国産の最たる物である生系の取引を研究していました。陸軍出入りの商売を始めてから、彼は山縣を訪ねた折り、商売の様子を訊かれ、こう言っています。

『サア、今までの所では、陸軍を相手のことで、君から口添を受けて居るので、少しも過もなく、順風に帆を揚げて居るやうなものぢやが、併し、斯様なことを何時まで、やつて居たのでは仕様がな。詰り、日本人の懐から、日本人の我輩が、金を受取つて来て、又日本人の懐へ、運んで行く、といふやうなもので、自分だけは飯に有付いて居るぢやらうが、大切な日本の国家

³前掲書、90 - 91頁。

が、富んで来ないから、それでは我輩が、町人に身を落した効がないといふものぢや』⁴

ここに、維新に挺身した身の、国を豊かにしようとの熱い想いをみてとれるとを感じる人もいるでしょう。いや政商の方便と思う人もいるでしょう。いずれかであるかは彼の最期の責任の取り方に明らかですが、とにかくも列強に囲繞され、当時の人口3500万にすぎず、内乱の後の新政府を抱えた貧しい国家の現実を変革し、富国への道を展望した人間であったことはたしかでしょう。それは「何うしても、外国の金を、日本へ引いて、それを使ふやうにしなければ、日本の國は富むものでない」⁵との言にあきらかです。そう考える山城屋の見るところ、我が国第一の産物である生糸の商いは、規模も小さく不十分なものに見えました。日本人の輸出商は相場物である生糸の値の高下を見て商いができるほどには準備金もなく、「唯地方の荷主から預つて来て、其預つて居る間の蔵敷を取つたり、又売込む場合に幾分かの口銭を得て、それで満足している…」⁶ありさまだったからです。ここで蔵敷とは荷主が倉庫業者に支払う敷料、保管料のことですから、荷を預かり、売り込んで売れた場合は口銭をとるような商売だったわけです。それでは外国の商人に儲けられるばかりで、外国の金を国に引き込むことにならないと考えた和助は、「自分が十分の資金を下して、生糸を倉へ積んで置いてから、値が良かつたら売つても宜いが、安ければ高くなるまで、待つて居るといふ」⁷ぐらいの商いを手がけるべきと考えるわけです。そうでなければ寄留地に店を張る異人に利益をとられるばかりだと。できうるなら異人の本国との直接取引までしてみたいというのが和助の野心でした。そのためには、十分な資金的準備が必要となります。

そうしてそこからが、山縣への相談となります。和助が当てにしていたの資金は山縣個人の金ではありませんでした。

『是だけの商法をする位の金は、君の一声で、直に出来るのぢやから、それを見込んで、相談に来たのぢやよ』

『ハ、一、何ういふことを見込んで来たのか』

『陸軍に沢山の遊金がある。それを我輩の方へ、廻して貰ひたいのぢや』⁸

陸軍の遊金とは、いざというときに備えた準備金ですから、それを自分のほうに廻してくれとの和助の話には、さすがの山縣も驚いたようです。しかし和助はうまく山縣を丸め込んでしまいます。

彼は、陸軍の金を私しようとしているわけではないのだ、ただ蔵のなかに金を遊ばせておいても金が増えるわけではないから、私に使わせれば利子もとれる、また生糸の商いで私が儲けても私が日本人であるかぎり、日本の国の儲けでしょう、その金が陸軍にとって万一の時の備えであるなら、必要なときにはいつでも返納します、という理屈をこねまし

⁴前掲書、94頁

⁵前掲書、94 - 95頁

⁶前掲書、95頁

⁷前掲書、95頁

⁸前掲書、96頁

た。山縣を説得する前に陸軍の会計監督であった人間を籠絡していた和助は山縣をその気にさせることに成功し、五十萬兩の大金を陸軍から引き出すことに成功します。

単位が両ですから、当然正金しょうきんでしょう。纏まった元手のあることは強いものです。横浜に店を出した山城屋は開店の日に軒先に日の丸を掲げ、並みの商人ではない意気を示し、それまでの輸出商を尻目に得意を広げました。資金があるのですから地方の荷主との交渉も有利に運べますし、現金を握った商法の強みで大きな取引もこなすようになります。損益勘定を表にして示し利子を納める山城屋に陸軍は大いに喜んだといえます。

しかし、生糸は相場の物で、ましてや値の張るものです。そしてその相場の変動は激しいものでした。そういう物を扱う当事者に損益の差が甚だしいのは当然で、うまく儲け進んで行ったところに落とし穴があるのはいつの時代も変わりません。思い切って仕掛けた取引の目算が外れます。欧州での普仏戦争が相場に影響し、大きく生糸の相場を下落させたのです。山城屋はこれによって多大の損失を被ります。陸軍から融通してもらった資金はすべてなくす羽目となりました。

しかし山城屋は戦争で下げた値であれば、戦争が終われば値を戻すと考え、これを機に欧州にでかけ直接取引の道を開くほかないと、またまた山縣を説得し、新規に十四五萬兩、陸軍から融通させることとなります。そうして彼はパリへと旅立ちます。

こうした派手な動きが、長州閥と敵対する他の藩閥の気づかぬわけはありません。陸軍の遊金を山城屋に貸し与え、なくしてしまったという山縣への攻撃は次第に盛んになってきました。ついに、当時、長州閥と激突して司法省の形を整えた司法卿の江藤新平の乗り出すところとなり、和助はパリから帰国せざるをえなくなります。「さういふ事情しじやうになつては最早致方もはやいたしかたがない。此事このことは我輩わがはいの一身しんに引受けて、必ず山縣其他の者かならやまがたそのたものには、禍わざはひをおよぼ及およぼさぬことにする …」⁹

和助は帳簿類を一切焼き捨て、陸軍には手形を切って返済をしたこととし、帳簿上の遺漏のないようにしたうえで、山城屋は陸軍省に出頭し、山縣を待つために応接所に通されるが、しばらくして応接所に入った役人が見たのは、切腹し、果てている和助の姿であったといえます。明治5年のことでした。

政商には理屈がつきまとうものです。和助の場合は我が国を豊かに国にしようとの一念であったかにみえます。同じ頃、長州藩の御用商人であった三谷家の没落を受けて代わりに長州閥に食い込んでいった三井家は同じころ、大蔵省と陸軍省からそれぞれ三十萬兩づつ、計六十萬兩を、なんと十か年年賦で、しかも無利息で引き出しています。その資金で三井の事業が拡大していきました。これに較べれば陸軍に利息を支払い、国家の公利公益を図った和助のような政商が立派にみえるから不思議です。

昨今の政商も振りかざす理念に欠けてはいないようですが、競争万能主義の新自由主義も評判を落とし始めた今、はたして理念に殉ずることがあるのかどうか、ちょっと注目ではあります。

⁹前掲書、107頁

人間の経済 第二期第52号(通巻130号)
2006年7月11日刊

編集・発行 ゲゼル研究会
221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一気付
Gesell Research Society Japan
<http://grsj.org/>
info@grsj.org
Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず



ゲゼル研究会